

祖・宗旨致吟味、帳面に記、請人を取、宿かし可申候。行衛なきものに宿賃候者、可爲曲言。但、往還一夜泊之ものは各別之事。

一、賄之諸勝負・傾城・かこひ女、堅令停止。附、踊・狂言・人形づかひ、其外不審成ものに宿かし申間敷事。

一、町人と侍申合、商賣物仕儀、堅停止之事。
一、町人欠落仕候敷、其外不審成跡之者候はゞ、不移時刻町奉行に可申斷事。

一、町方闕所之家財、町同心・町肝煎立合、代替置、町中入用に遣、年中一度充町奉行勘定可聞届事。

一、年六十已前并病人之外、町奉行へ不斷乗物に乗候儀、停止之事。

一、本町・地子町出入之儀、別紙書付遣候事。

一、町奉行年中四度金澤町中打廻、様子見届、諸事可申付事。

一、町中より町奉行一人に、爲年頭祝儀銀子二拾枚充、五節句鳥目五拾疋充可遣之。右之外、聊之物に而も受用仕間敷事。

一、籠賄之儀は、十人組に可申付事。朱書。唯今は公儀賄に御座候。

一、町年寄十人三人扶持被下候。町中より毎年銀子五枚充可遣候。附り、町肝煎・横目肝煎扶持は、相對次第之事。

朱書。唯今は町年寄三人に而御座候。一人に三人扶持充被下候。外本町より一人に銀子一枚充、并町肝煎扶持之儀は、十四年以前に極申候。是には高下御座候。右被仰出之通、違背有間敷者也。

萬治二年六月朔日 御印

今 枝 民 部
奥 村 因 幡
津 田 玄 蕃
前 田 對 馬

二 金澤本町・地子町町夫之儀

御定

金澤町夫之定

一 萬人 本町二拾七町
二千人 地子町七町

右年中夫數如先規被仰出候條、出入之儀割場奉行切手を取置、於御算用場遂勘定、不足有之候者、一人五分充之積を以銀子可上之、過上有之候者、同前銀子可被下者也。

萬治二年六月朔日

今 枝 民 部
津 田 玄 蕃
奥 村 因 幡
前 田 對 馬

金澤町肝煎

三 喧嘩口論及火事之刻罷出候儀

御定

覺

一、喧嘩口論之節、雖爲親子・兄弟、其場に日向間敷候。勿論荷擔之輩、本人より可爲曲言事。

一、火事之刻、其場に親子・兄弟・むこ・しうと・こじうと・伯父・甥并家來之者、此外罷出候事堅令停止候。火鎮り候とも、其日其夜之内爲見廻使も遣間敷事。

一、夜行月無之候はゞ、火をとぼし可申候。相違之輩可爲

曲言事。

子四月廿四日

四 他國に召連候日傭之儀御定

御家中侍并町人日用雇候定之事

一、他國に日用雇召連候敷、飛脚等遣候共、請人を取、他國に居とまらせ申間敷候。請人不相立、日用雇他國に遣候儀有之間敷事。

一、右日用雇候刻、請狀町會所に遣置、罷歸候日限町年寄共致吟味、右之請狀可相返。若日限違候者、請人手前穿鑿可仕事。

一、他國に召連參候日限、上下五十日。定之日限越候はゞ曲事に可被仰付候。但、雇申主人斷に候はゞ、日限相延候共不苦事。

萬治三年正月晦日

五 變死人・盜人及奉公人之儀御定

定